

はじめに

課題設定：関東軍はチャハル作戦を通じて蒙疆地域を占領し、蒙疆三自治政府を樹立。／
蒙疆政権成立史の序章として、①蒙疆地域を高度防共地域として育成をはかる
関東軍の戦略構想、②陸軍中央の戦争指導の迷走、③蒋介石のチャハル・綏遠
・山西における抗戦戦略の3点に焦点を合わせて、チャハル作戦をめぐる錯綜
して複雑な歴史状況に全体的見通しを与える。

I 蒋介石の「安内攘外」政策と蒙古人の運命

1 「安内攘外」政策

「一面交渉、一面抵抗」

：蒋介石は全国統一を妨げる2つの敵（①日本軍の軍事侵略、②中共軍の反乱）
に優先順位を設け、共産党の殲滅が成功するまで、対日妥協政策を採用。

蒋介石「敵か？友か？」（1934年12月）

：①日本は中国と戦争するのか、協調するのか。日中両国は提携すべきである。
②日本の武力は中国より強大であるが、中国と戦争しても、速戦即決の勝利はなく、
首都を占領しても死命を制することはできず、全中国を制圧できない。

2 南京国民政府の対蒙古政策

蒋介石・何応欽の指示

- ①南京国民政府は百靈廟會議に対して、「外部の背景」に疑惑を抱く（1933年秋）。
- ②蒋介石→徳王「高ぶらず、へつらわず、様子を見て事を運べ」（1934年9月）。
- ③何応欽→徳王「教育・実業・交通の基本建設に当たれ」（1935年6月）。
- ④蒋介石は呉鶴齡と会見し、蒙政会の「自救自全」を黙認（1935年末）。
- ⑤綏遠事件で蒋介石は察境蒙政会委員長徳王宛に問責電報を打つ（1936年11月）。
- ⑥蒋介石は徳王の母親の葬儀に弔問使節を送る（1936年末）。

3 国民党第五回党大会における蒋介石の外交演説（1935年11月19日）

要旨：①蒋介石「和平が完全な絶望に到らぬ前、けっして和平を放棄しない。犠牲が
最後の関頭に到らないうちは、けっして軽はずみに犠牲を口にしない」。
②何応欽「抗戦が始まれば、黄河以北は失われ、長江流域も保持しがたい」。
③呉鶴齡は蒋介石・何応欽の演説を聴いて、中央が黄河以北を手放そうとして
おり、蒙古もその範囲に入っているものと痛感。

II 関東軍の蒙疆政権樹立構想

1 関東軍司令部の事変処理方針

軍司令部：①軍司令官の意見具申（片倉少佐起案、1937年8月13日）

「当面の目標を北支中央軍の撃滅、南京政権の徹底的膺懲に集中し、其抵抗を断念せしめ時局の收拾を急速且至短期間に終結せしむること絶対必要」。

②「対時局処理要項」（8月14日）

「北支問題の解決は～対蘇作戦準備の為に一正面の安全を期するを第一義とし、～少くも察哈爾、河北、山東各省の地域を肅清自立せしむ。～将来山西を統合す。～察北、察南を統合する政権を樹立し、～将来綏遠を統合す」。

2 第三課政策参謀片倉衷少佐の対蒙施策

蒙疆統治構想

：①「察哈爾方面政治工作緊急処理要綱」（8月13日）

「帝国軍の平綏沿線経略に伴い先ずチャハル省地域を肅清安定し、～将来対内蒙竝綏遠、山西工作を有利に進展せしむるを以て根本方針とし～」。

②「蒙疆方面政治工作指導要綱」（10月1日）

蒙疆三自治政府を組織し、蒙疆連合委員会で三政権の重要事項を協議。

3 チャハル政治工作班による新占領地接收工作

政治工作班

- ：①東条参謀長は満州国総務長官星野直樹に政治工作班代表の推薦を求める。／星野は間島省省長金井章次を推薦し、第三課の片倉少佐との会談を指示。
②片倉は「蒙古最良でない」金井を選び、察南での新政権樹立を求める。
③片倉は金井の意見を参考にして、蒙疆政権樹立の青写真を起案。

III チャハル作戦

1 チャハル作戦をめぐる不拡大方針と拡大方針の対立

関東軍チャハル派遣兵団の張家口占領

：7月30日 関東軍は内蒙方面の作戦指導に関する事項を陸軍中央に具申。

8月5日 関東軍は察北防衛の為、ドロンの堤支隊の張北派遣を中央に具申。

／石原第一部長は派兵に反対し、武藤作戦課長は熱心に支持。

7日 参謀本部は堤支隊の張北派遣を容認。

14日 関東軍チャハル派遣兵団司令部を編成（19日、張北進出）。

27日 張家口占領。

2 支那駐屯軍（北支那方面軍）の作戦構想と長城作戦

支那駐屯軍（北支那方面軍）の作戦構想

：平津一帯を平定してのち、支那駐屯軍（北支那方面軍）は京漢線沿線に主力を、津浦線沿線に一部部隊を配置して、南下作戦を予定。

長城作戦による第五師団の北上

- ：①湯恩伯軍・傅作義軍の精鋭部隊が南口・八達嶺方面へ進出。
- ②支那駐屯軍は8月11日に独立混成第十一旅団を投入し、苦戦に陥ったので、保定方面に使用予定であった内地派遣の第五師団を追加投入。
- ③8月29日に第五師団は下花園を占領し、関東軍チャハル派遣兵団と連絡。／第五師団は蔚方面に進出し、保定作戦の準備に入ったが、中国軍が山西東北方面から攻勢に出てきたので、関東軍蒙疆兵団と協力して山西作戦を企図。

3 第五師団の山西省への進撃

山西作戦：参謀本部・北支那方面軍は第五師団を保定作戦に使用予定で、山西作戦に反対。／9月24日、保定占領。／10月1日、参謀本部は大命によって、北支那方面軍に山西作戦の実施命令を下達。／第五師団は関東軍と呼応して山西省へ進撃し、平型関・忻口鎮で苦戦しながら、11月9日に太原を占領。

綏遠作戦：関東軍・蒙古軍は綏遠作戦を実施し、有力な抵抗を受けずに帰綏・包頭を占領。

兵力抽出：10月中旬、陸軍中央部は苦戦する上海方面へ増援の為、北支那方面軍の砲弾の一部を融通し、第六・第十六師団・国崎支隊（第五師団）を上海へ抽出。

4 チャハル作戦に対する将官の感想（竹田宮との対談、1940年）

石原莞爾少将（第一部長）

：「内蒙作戦が起ったのは、～敵の大將湯恩伯に引摺られたのであります。此の作戦の時も彼が猛烈果敢に這入って来て第五師団は予想以上に苦戦しました」。

他の将官：橋本群少将（第一部長）、河辺虎四郎大佐（戦争指導課長・作戦課長）、西村敏雄少佐（作戦課参謀）、香月清司中将（支那駐屯軍・第一軍司令官）等は、異口同音に南口作戦は中国軍の攻勢によって受動的に開始されたと証言。

5 辻正信大尉の第五師団における活躍

辻の扇動：①1934年の士官学校事件以来、片倉少佐は辻大尉のよき理解者。

②盧溝橋事件直後、関東軍は辻参謀を連絡のために支那駐屯軍に派遣。

③辻大尉は片倉の推薦で支那駐屯軍（のち、北支那方面軍）参謀部へ異動。

④辻大尉は第五師団への派遣参謀となり、板垣師団長の庇護下で作戦指導。

⑤辻大尉は第五師団と関東軍・北支那方面軍との連絡に飛び回り、陸軍中央や北支那方面軍司令官・参謀長の意向に反して、山西作戦の強行を根回し。

IV 蒋介石「空間を以って時間に換える抗戦戦略」

1 蒋介石の初期抗戦戦略

国民政府国防会議（1937年8月7日）

：「野戦戦略の分野において持久戦略を採用し、空間を以って時間に換え、逐次敵を消耗させ、優劣の状況を転換させ、最後の勝利を勝ち取る」。

野戦戦略：①国軍の有力な兵団を南口に向けて進出させ、平津方面にいる日本軍を軽々しく南下させない。

②日本軍が平漢線北側で「中国軍への一撃」を加えて、中国を屈服させる目的を達成できないようにする。

③国軍が終始山西省を制御して、平漢線に沿った日本軍の側背に脅威を与え、その南下を遅らせる。

④国軍が瀋滬地区で攻勢を発動し、日本軍が主力を華東へ転用するよう迫って、日本軍の作戦線の方向を変える。

2 軍事委員会の作戦指導計画（8月20日）

第二戦区：「平綏路は第二戦区の生命線で、～張北・赤城・沽源を攻略し、国軍はできるだけ広く展開する。もし国軍が終始南口・赤城・沽源の線を保持できたならば、平津方面の敵はけっして南下の危険を犯すことはない。～戦況の推移によって、山西東北方面に手厚く兵力を集め、永久固守を期す」。

3 軍統の蒙疆政府要人に対する政治工作

政治工作：①徳王は軍統特務馬漢三を蒙疆へ派遣し、徳王を含む政府要人と連絡を取る。

②五原作戦（1940年1月）前、蒋介石は徳王の重慶への脱出の要求を認めず、「現地に残まって軍民の訓練に当たり、将来に備えよ」と指示。

漢奸裁判：①戦後、南京国民政府は汪兆銘政権の関係者を漢奸裁判で厳しく処罰する一方、蒙疆政権の要人を処罰せず。

②戦後、徳王は蒋介石の前で釈明し、処罰を受けず北平での居住を許される。

むすび

陸軍中央：陸軍中央では不拡大方針と拡大方針が対立し、チャハル(山西)・上海に兵力を分散した結果、京漢線を南下して中国軍に痛打を与える好機を逃す。

関東軍：関東軍はチャハル作戦・山西作戦を通じて、蒋介石が持久作戦へ移行するのを手助けし、国民政府が長期抗戦体制を再構築する時間的余裕を与える。

蒋介石：蒋介石は新潟の高田砲兵聯隊で軍事訓練を受け、日本軍の行動様式を深く理解し、戦術的敗北を戦略的勝利に結びつける巧妙な抗戦戦略を採用した。